

## 新 おおさか KEYワード【第21回】

# 「蒐集も亦創作なり」—コレクター山本發次郎 大阪らしい美術館を

2月2日、中之島に大阪中之島美術館が開館した。昭和58(1983)年、大阪市制100周年記念事業基本構想の「大阪市立近代美術館(仮称)」として大阪大学医学部跡地に計画された美術館である。

大阪市は明治22(1889)年に誕生した。特例市制という制度によって東京、京都とともに住民自治は制限され、国から派遣された国選知事が市長を兼任したが、明治31(1898)年に府から独立し、初の市長選挙が実施される。その期間も含めた100周年であった。平成2(1990)年に「近代美術館建設準備室」が設置され、昭和58(1983)年の基本構想から約40年を費やしての開館となる。

近代美術館が構想された契機となったのが、大阪の実業家・山本發次郎(1886~1951)のご遺族から、大阪出身の天才洋画家・佐伯祐三(1898~1928)の油彩画をはじめとする近代洋画、墨蹟、東南アジアの染織など合計約580点が大阪市に寄贈されたことである。

大阪市には、昭和11(1936)年開館の大阪市立美術館があったが、古美術を中心としたコレクションであり、半世紀を経て、近代・現代美術を対象とした新しい美術館が求められていた。その中核として佐伯祐三作品の大コレクションが期待されたのである。

山本コレクションは作品の質の高さもさることながら、個性的なコレクターである發次郎の近代的な美意識も特筆すべきもので、彼がコレクションに関して残した言葉も示唆に富む。例えば戦時下の文章では、蒐集は時勢に反した「閑事業、御道楽のやう」に見えるかもしれないが、「美術品の蒐集は永遠的的文化事業」であることを信じていると語っている。

大正昭和初期に大阪市立美術館が建設された背景には、大正14(1925)年に誕生した“大大阪”時代の哲学として、近代都市には近代都市にふさわしい文化施設が整っていないといけないという考えがあった。そのために美術館建設は急務であったわけである。山本の「永遠的的文化事業」という認識も、コレクターのエゴではなく、“大大阪”時代にあって社会を見渡した発想だった。

さらに、美術品を「山本一個の主観的のコレクションとして蒐集も亦創作なりとの観念で集めている」と述べるのも面白い。「世の富豪のように有価証券を所持しているが如き心持ち」で美術品を集めるのではなく、審美眼や個性を重視し「芸術には個性がなければ生命がないわけである。それと同様に芸術の鑑賞と理解にも亦個性がなくてはならぬ」と主張する。山本が、大原美術館や国立西洋美術館の母体となった大原孫三郎や松方幸次郎のコレクションについて「一個の趣味とか意見とかが現はれていない所に不満がある」(「山本發次郎氏の蒐集」と語ったことも、この信念による。

実現されなかったが、山本は自らの美意識を公表する美術館を作りたいと願って、「山本コレクションとして多少偏する所があつても、自分の主観を發揮するものを集め将来美術館でも建てる積り」とし、「私は私一個の見識と主観の徹している山本コレクションとして将来世に残存して置きたいと考えている」(「芸術の個性と鑑賞の個性」と語っている。

新しくオープンする美術館も、“大大阪”時代の遺産があつてこそその美術館であり、こうした山本發次郎の強烈な思いも、新しい美術館の底流にはある。ただし、大阪中之島美術館の建物は全体が黒色だが、山本がイメージしていた自らの美術館は白亜の建物であつたらしいが…。

ちなみに今春、“大阪画壇”に関する展覧会が各地で開かれる。京都国立近代美術館では「サロン! 雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」(3月23日~5月8日)、泉屋博古館東京では「リニューアルオープン記念展I 日本画トライアングル」(3月19日~5月8日)として東京、京都に大阪画壇を対峙させる展覧会が予定されている。京都、東京、そして新しい美術館誕生で、大阪の美術があらためて評価されるのはうれしい限りだ。



佐伯祐三(郵便配達夫)  
油彩・カンヴァス 1923年  
大阪中之島美術館所蔵



大阪中之島美術館の内観  
(パッサージュ)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現象—」(創元社)など。